田邊太一について

――ある幕臣のフランス体験――

富田　仁

1

田邊太一は天保二年（一八三〇年）九月十六日、儒者田邊石庵の次子として江戸に生まれた。幼名を定輔と云った[1]。

田邊家は代々与力で、初代は次郎太夫と称した。五代目の克忠は尾張海西郡の医師、村瀬厚英の三女鏑子に養嗣子を迎えた。名は海輔、字は季德、号を石庵と云い、のちに新次郎と名乗ったこの養嗣子は佐久間象山、渡邊華山、頼山陽などとの交際をもつ人物であり、『清名家小傳』と題する著書も残している。彼は二人の男子を鏑子との間にもうけた。長男は孫次郎、次男は定輔と命名された。定輔、すなわち太一は幼時より神童の誉高く、十三歳のときに昌平黌に入学し、その才名を謳われ、中村敬宇とともに大学雙美の称をえた。十八歳で同黌学試に応じて甲科及第した。この学問吟味がいかに難関であったかは当時漢詩文に優れた一歳年長の木村芥舟がこれに合格しなかったことからも想像されることだろう。

二十四歳の十一月、太一は学問所教授方出役となり、さらに甲府徽典館教授（学頭）に挙げられて甲府に赴き、三年間滞在した。任期満了後は江戸に戻り、やがて外国奉行支配下の書物御用出役を命ぜられ、横浜開港のための議案の浄書や対談の筆記に携った。外国奉行は水野筑後守忠德であった。

水野は文久元年に派遣される遣欧使節の副使に選ばれたが、イギリス公使オールコックの横槍で任命が取り消されたため、太一も随行の夢を破られてしまった。

文久元年十二月四日、水野筑後守は小笠原に開拓使として派遣された。太一はこれに随行を命じられ、同時に外国奉行支配調役並（扶持米三十俵）に任命された。これは遣欧使節副使取止めによる水野の不満を解くための処置であったようだが、一方では水野ほどの才がなくてはできない難儀な大役であった。小笠原島が日本に属するのか否か、外国の公使からの問い合わせを受け、老中安藤対馬守が気を揉んでいたという事情もあって、小笠原島巡検となったのである。ここで注意したいのは次男であった太一が初めて扶持をあたえられて一家をなしたことである。太一はときに三十歳であった。

文久二年三月、足かけ四カ月ぶりに江戸に戻ったあと、太一は同年四月荒井氏己巳子と結婚する。本家の兄がコレラで病死したために隣家に引越し、家族の後見人となる。太一の家に男子が出産するがすぐに死亡するというような家庭内の動きに加えて、外はまさに鎖国攘夷の議論沸騰する時代であった。

此の程の世の中の有様すべて鼎の涌くやうにおこりたち、鎖國攘夷の說盛り

になりて、少し洋書にても繙くものは、攘夷家の憎みはなはだしく、予も亦、外國奉行調役の職にあり、開國の利をときなどするを、彼輩敵としねらひて、或は門前に張札して燒討にすべしと虚喝し、あるは途にあやしき者尾行しきたり、あるは上野三橋など、人目につくべき場所に、天誅を行ふべしと張札されしなど、家内の者は一日も安き心地はなかりしなり。然りけれども、予はいよ〳〵志を堅うして青年輩の餓鬼大將となり、米田桂次郎の英語に熟せるをもて、これを家におき、志ある輩の田邊の兄貴の意にて田兄田兄と予を推して富永冬樹、矢野次郎、沼間守一、須藤時二郎、尺振八、乙骨太郎乙、益田孝、清水卯三郎、又は箕作貞一郎、麟麟など、一日として家にきたらぬ日もなく、片言まじりの英書つゞりして彼文物をしたひ、鎖國の不利をときなどすれども、時の勢の詮方もなく、上司は鎖國の說勝を得て、先づ鎖國談判の爲、歐羅巴、佛蘭西へ、池田筑後守、河津伊豆守、河田相模守、さし遣はさるべく命ぜられたり。予も此時、組頭にて、隨行を命ぜられつ。

（『夜半の埋火』2）

文久三年、池田筑後守たちの横浜鎖港使節としての欧州派遣が決定すると、同年十一月、太一は外国奉行支配組頭に抜擢されて、随行を命ぜられた。

横浜鎖港談判使節の派遣事情について、大塚武松氏はつぎのように説明している。

文久三年八月十八日の政變に依り、急激な尊攘及び倒幕派は、京都から驅逐されたが、攘夷論は依然として消滅せず、屢々督促の朝旨が下された。幕府は、老中酒井忠績（雅樂頭）に上京させて、攘夷の遲延を辯疏し、將軍の明春再上洛を奏請し、又、攘夷の公約に處する窮策として、暫く横濱を鎖港し、貿易を長崎・箱館に限定する議を定め、九月十四日・十六日老中板倉勝靜（周防守）・同水野忠精（和泉守）・同井上正直（河内守）等は、米國公使プリューキン・蘭國總領事ポルスブルックと築地海軍操練所に於て會見し、同意を求めたが、却つて「國内の紛紜を鎮靜するに努めずして、締盟國に對し、斯かる談判を爲すは、全く政府の弱點を示すもので、國辱に類せずや」と反對されたので、英・佛兩國公使への交渉をも躊躇し、纔に十月朔日・十一日、小笠原長行が發した外國人逐放の通牒を撤回して、列國公使の鋒先を緩和せんと試みたが成らず、幕府は益々苦惱する事と爲った。この形勢を看取した佛國公使ベルクール及び同公使館通辨官ブレックマンは、特使を佛國皇帝ナポレオン三世の朝に送らん事を懇願した。

（『幕末外交史の研究』3）

この使節派遣のもう一つの使命に同年九月二日に横浜郊外井土ケ谷で斬殺されたフランスのカミュ中尉と下関海峡で砲撃を受けたキンシャン号の賠償問題の解決があった。フランスの駐日公使ベルクールは本国外相の更迭のためにその対東洋政策、対英態度が変化したので近く辞任帰国の予定でいた。したがって、本来はベルクールが解決の任に当るべき賠償問題を日本側の使節に直接委ねようとした気配がみられるのであった。

各国の駐日公使がいずれも横浜鎖港には反対を表明していたので、幕府としては使節を各国に送れば、その期間は各国の督促を受けないで済むという判断のもとに使節派遣を決議したのであった。

使節の随員に命ぜられた太一は開国こそ時代の勢いと考えていたので、使命の矛盾に任命を固辞したが許されず、その苦衷をいまは隠退の水野筑後守に訴えた。水野は日本の将来のためにも外国を見聞するよう太一に強くすすめた。また、副使の河津伊豆守も、

「且子は未だ子の身の危きを知らずや、鎖攘を唱ふる浪士のみならず、幕士の内にも、子を奸吏の一として、賣國の賊なりとて、これを殺さんと企つるものあり、予は新徵組頭（新徵組は當時浪士をあつめて之を扶持し、その暴行を肆にせしめざらんやうにせしものなり）として、よく其事實を悉せり、されば暫時禍を海外に避けて、文明と稱せらるゝ西洋各國の風光を觀んこと兩全の策ならずや4）」

という忠告をあたえている。その結果、太一は随行に同意したのであった。

使節の一行の任命は同年十一月で、その人数は三十四人、ほかにオランダ生れのフランス人、ブレッキマンが案内兼通訳として同行した。それはつぎのような顔ぶれであった6)。

正使　池田筑後守（二十八歳）
副使　河津伊豆守（四十四歳）
目付　河田相模（三十歳）
外国奉行支配組頭　田邊太一（三十七歳）
調役格勘定格調役　田中廉太郎（二十二歳）
調役格通辨御用頭取　西吉十郎（三十七歳）
徒目付　齋藤次郎太郎（三十四歳）
調役並　須藤時一郎（三十二歳）
調役格通辨御用出役　鹽田三郎（十九歳）
小人目付　谷津勘四郎（三十一歳）
小人頭格小人目付　堀江六五郎（三十七歳）
定役元締・進物取次上番格　益田鷹之助（二十八歳）
定役　杉浦愛藏（二十五歳）
定役　横山敬一（佛國にて死亡）
同心　矢野次郎兵衛（十五歳）
定役格同心　松濤權之丞（三十八歳）
通辨出役　尺振八（二十三歳）
通辨御用當分御雇　益田進（十六歳）
御手附蘭譯御用出役　山内六三郎（二十七歳）
蕃書調所出役教授手傳海陸軍兵書取調出役　原田吾一（三十四歳）
池田家來　小泉保右ェ門（三十八歳）
大關半之助（四十歳）
浦上佐助（二十六歳）
河津家來衣裳方　岩松太郎（二十三歳）
別所左二郎（二十五歳）
高木留三郎（二十七歳）
河田家來　玉木三彌（二十三歳）
菅波恒（二十歳）
田邊内三宅復一（十六歳）
田中内名倉予何人
西内森田彌助（三十九歳）
齋藤内浦本時藤（二十歳）
一同小使　益田進
理髪師　乙骨亘
青木梅藏

（右のリストは尾佐竹猛『夷狄の國へ』〔萬里閣書房・昭和四年七月刊〕二八二～二八五ページによる）

この使節派遣については一部に反対を唱える者もいたが、一橋慶喜はこれを抑えた。対外策よりもむしろ対内策にこの使節派遣の意義があったからである。つまり、使節派遣によって朝廷の鎖港攘夷督促の気勢をそぐことが狙いであった。太一を含めて使節一行の中にも使節の目的達成を危ぶむ者がいたが、ともかく、文久三年十二月二十七日、一行は仏国の軍艦ル・モンジュ号で横浜から出帆し、上海に向った。そこでフランス郵船に乗りかえた。日本側としては横浜鎖港談判

のための訪欧であったが、フランス側では井戸ケ谷におけるフランス士官殺害と下関におけるフランス軍艦への砲撃の謝罪のための遣使とみなして一行にさまざまな配慮をしてくれたのであった。

上海ではイギリス公使が本国からの帰任の途中であった。公使は使節の訪欧の使命を聞いて驚き、いまや開市開港こそ必須であり、鎖港など心外であると論駁した。使節はすでにその使命の遂行の困難さを覚えなくてはならなかった。

使節は上海からフランスの蒸気船で香港に赴き、そこで定期便の郵船に乗りかえ、海路スエズまで至り、上陸して陸路をカイロを経てアレキサンドリアに向い、そこからふたたび郵船でフランスはマルセイユにたどりついた。

文久二年三月十五日（一八六二年四月十三日）、使節はパリでフランス皇帝ナポレオン三世に憑書（依頼書）の奉呈のために謁見した。そのあとドルーアン・ド・リュイ外相と談判を開始した。殺害されたフランス士官の遺族に十二万フランの扶助金の支払い問題を含めて前後九回の面接談判を二カ月間に行なった。

而して彼（リュイ外相）は我輩の使命をきく、循々として論じて曰く。横濱鎖港は承諾し能はざるのみならず、これ却て日本政府の爲になるまじ、且最前兩都兩港延期の談判允諾の際、豫約せし條件において、日本政府にて爾後取行ふべき約束を履行し能はざれば、何時なりとも、其允諾せし約束を廢し、その開市開港を促すべしといへる旨に基き、數度の殺傷の沙汰、殊に下關にて謂れなく通航の外國船を砲撃せしごときは、効允諾を引戻すべきに充分の理あるを以て、既に英國とも相結て、之を促すべき決議をなせし程なれば、既に開きある横濱を鎖さんなどゝは思もよらず、されどその開期を促すことは、隨分の困厄なるべしとは推察せざるにあらざれば、こゝにて今開きある三港、即ち横濱、長崎、箱館とも、輸出入物貨に、永久課税することなく、自由港として外國に對し厚意を示さるゝの事只今使節の權を以て約束し得ば、猶ほ英國にも示し合せて、これを見合すとも妨げずといひ出せり　（『幕末外交談』）

フランス側は関税徴廃を提案したり、フォン・シーボルトを通じて倒幕派鎮定にあたっては艦船銃砲の提供の便も計る旨を伝えたりして、使節一行に硬軟自在の外交接衝を行なった。

結局、使節は一通の約書を交換して帰国の途についた。この約書の覚書は現在「パリの廃約」として伝えられているものである。つぎにこれを掲げよう。

元治元年、甲子、五月二十二日、西暦、一千八百六十四年、第六月二十五日、佛國外務執政と、日本の使節との間に左の約定を決定せり。

佛國皇帝、日本大君と、双方の信任を證顯して、兩國の間に存在する友愛及び貿易の交通を堅固にせんことを顯はし、双方協議の上、特別の取り極めをもつて、千八百六十二年以來、兩政府の間に起こりたる難事を、治正せんことを決せり。

故に、佛國皇帝の外務執政、ドルワン・ド・リュイスと、大君の使節、正しく此事件に任ぜられたる、池田筑後守、河津伊豆守、河田相模守と、次の個條を決定せり。

第一條

千八百六十三年七月中、長州に於て、佛國海軍のキャンセン艦に向かひ、發砲に及びし一件の償として大君の使節、日本へ歸着の後、三カ月後に、日本政府、江戸に在留せる佛國皇帝の公使へ、墨斯哥銀、十四萬弗（ドル）の償金を拂はんことを約せり。

但し、内十萬弗は、政府自から拂ふべく、四萬弗は、長州より拂ふべし。

第二條

大君の使節、日本へ歸着の後、三カ月の内に、日本政府下の關海峡を過んと欲する佛國船の妨害を除去せしめん事を約せり、而して、已を得ざる時には兵力を用ひ、又時宜により、佛國海軍分隊指揮官と一致して、此通行を妨げなき

様なさん事を約せり。

第三條

佛蘭西と日本との貿易交通をして、次第に盛大ならしめんが爲め、千八百五十八年十月九日、江戸に於いて兩國の間に締結し條約行はるる期限の間、佛商人或は佛旗を建て輸入する品物の爲に、大君政府より最後に外國交易に許與へられたる、減税表目を推用すべし。

故に此條約を精密に守る間は、茶の包裝に用る、左の物品は、運上所にて無税にて通過すべし、卽ち、葉鉛、鉛蠟、敷物、籐、畫に用る油、藍、硫酸、石灰、平鍋、籠。

又日本運上所にては、左の物品輸入の時、只其價の五分税を取立つべし。酒、酒精物、白砂糖、錺、錺葉、器械の部分、麻の織物、時計、懐中時計及び鎖、硝子器藥。而して硝子及鏡、陶器、飾り玉、化粧の香具、石鹼、兵器、小刀の類、書籍、紙、彫刻物、畫には、六分の税を取立べし。

第四條

右の約定は、千八百五十八年十月九日、佛蘭西と日本との間に結たる條約の犯すべからざる部分の一分と見做し、双方主君の本書交換を要せず、直に實行すべし6)。

太一はこの約定の締結に協賛拾補つまり補佐として携わったのであったが、その当時には約定の内容にある種の満足感、いや得意さを覚えていたようである。だが、七月十七日、横浜に帰着の報が伝わるや、幕府があわてて使節一行の上陸を差しとめる処置をとるにおよんで、一行は事の重大さに気づいた。

池田筑後守は江戸入りを強行した。そのため、その夜のうちに御役御免、知行高半分召上げ、さらに隠居を命ぜられるという徴戒処分を受けた。これはひとり池田だけではなく、河津、河田、田邊にいたるまで、免職の上逼塞または閉門という処罰に遇った。

フランス公使レオン・ロッシュはパリで調印した条約の実施の可否を幕府に問い合わせてきたが、これに対して、幕府は使節がその権限を超えたことを行なったものであるので処罰したのであり、使節の約定は採用しない旨を返答した。それで横浜停泊中の各国艦隊はただちに下関へ向けて出航しなくてはならなかった。

使節たちは帰朝理由を述べた上陳書を幕府に呈上し、その立場を開陳している。彼らとしては滞仏中とうてい鎖港の可能性がないことを知り、海外で国辱を招くよりは死を賭しても鎖港の非を訴えようとして無断で帰国し、江戸入府を決行したのであった。

…私共談別不行届より、両國間の不都合引出し、御生體の上、彌兵機を促候場合に至り候得ば、萬死無償の罪は申迄も無之、夫等の爲衅端相開候場合に相成候節は、得失成敗の數は、前申上通に有之候處、看々國家を陷入候次第に相成、且御國内隠然背叛の志を抱き候輩は其機に乘じ、如何奸計相巧申す難計、詰り外憂のみならず、内亂の程も杞憂被仕候上は、益々以此上の處恐入奉存候間、私共再三評議を盡し、召連候支配向迄も見込承り糾し、筑後守、伊豆守、内一人は、本地より引分れ立戻り、右次第申し上、一人は猶引續き御使相勤可申哉とも評議仕候得共、左候而は御体裁も不宜且御使相勤候方にては、矢張從前の御趣意を以談別仕候儀に付、其間に又々如何様の行違相生じ可申哉も難計、此以恐入候儀に奉存候間、兼而相伺置候通、一同一と先づ歸朝仕、一體の事情逐一申上、鎖港の御談判より戰爭を被招、和親御保續の御趣意、却て和親を被破候端と相成候事、無上の御失策に可有之と、被存候見込、不包申上げ候方、御爲め可然と評決仕、尤彌御條約御保守御交誼御永續の御根基相定候上は、猶又各國へ御布達の爲、使節被差遣候様相成可申、其節は再渡可仕積申合候7)。

ところで、この遣欧使節に随行したことは、太一にとっては初めて

外国、とりわけフランスに足を踏み入れる機会であった。外交的・政治的な使命遂行のための訪仏であったが、太一は先進文明国にどのような印象をもったのだろうか。残念なことに、太一はその名著『幕末外交談』のような書物にもそのような印象を具体的にはなにひとつ述べていない。外交接衝の過程を叙述するだけで、文化論ないし文明論的な意見、あるいは見解など主観の吐露の痕跡を見出しがたい。たとえばフランス語の学習についてもすこぶる簡単にべつな個所で述べているにすぎない。

丁度筑後守に随行して参った時に「ロニー」と云ふ者に遇ひました。これが妙な男でありまして、日本の土地と云ふ者を一度も踐んだことが無いで、日本語も出來片假名で日本文を書く、それで使節に隨行して參りました若手の尺振八、矢野次郎抔といふ樣な人は附添つて往つても何の用もないから、此「ロニー」を頼んで佛蘭西語の教授してもらった。

（『田邊太一君の幕府時代外交實歴談』）

レオン・ロニー Léon de Rosny.（一八三七～一九一六?）に師事してフランス語をどのように学んだことだろうか。詳細は不明である。使節の通訳としてはメルメ・ド・カションに箱館でフランス語の教授を受けた鹽田三郎がいたが、そのほかの者もやはりみずからフランス語を学修する必要を覚えたのであろう。

ロニーは独学で日本語を学び、日本に関する多数の著作を残した日本学者（ジャパノロジー）であり、文久二年（一八六二年）の遣欧使節・竹内下野守一行の渡仏のときにも通訳の任に当っているが、翌年には東洋語学校の日本語講義を担当するようになった[9]。池田筑後守一行の遣欧使節がフランスを訪れたときには、あまりにも日本びいきのためか、フランス政府はロニーを通訳に採用しなかったばかりではなく、日本人との接触も禁じたほどであった。このことは『池田筑後守復命書』に、

「佛人にて羅尼と申者、先御使のものより懇切の待遇を蒙り候由にて、專ら御國の御爲、乍蔭周旋いたし、却而當時其本國政府の首尾を損じ、私共巴里滞在中には、日本人に接見の義政府より被二差止一候者抔に有之。」

と記されている[10]。だが、一行の一員であった三宅復一（のち秀、東京帝國大學醫科大學々長）について孫の三浦義彰が編んだ伝記『文久航海記』によっても、つぎのようにロニーとの接触があったことが分る。

巴里滞在中には有名の「レオンロニー」と云ふ和漢學者の自宅書齋へ訪れましたが、康熙字典や源氏物語などが座右に取散してありました[11]。

ちなみに、三宅秀はロニーからフランス語のみならず生物学を学んだようである。

ところで、ロニーと識り合ったことはさらにべつな人間関係を展開させる機縁となった。

所が「ロニー」の紹介で「モンブラン」に遇つて呉れないかといふので筑後守がそんな事なら往つて見ろといふことで「モンブラン」の所へ往つて見ました。（中略）「コント、モンブラン」と言つて伯爵であります。白耳義堺に領分を持つて居る、元封建時代から傳へて居る領分を持つて居る、金が澤山あるのでございますが、領分には引込んでは居られない、虚榮心が盛んで、交際場裏へ出て羽振りの利く樣にしたいといふのが、彼れの唯一の願ひであつたらうと思ひます。跡から考へますと、其の樣なことを仄めかして、今度の御談判はお望みがありますか、是は外の人には談判が出來ぬといふ樣なことを言つて、佛國政府へお頼みのことがあれば自分が盡力をするといふ樣な事を說いたこと

であります。

（『田邊太一君の幕府時代外交實歴談』[12]）

モンブラン伯は池田筑後守一行のために行き詰った談判の打開の斡旋を申し出たが、使節はこれを断わり、フィリップ・フォン・シーボルトを相談相手としたのだった。大塚武松氏はシーボルトが果して日本のために有益な助言者であったかどうかを疑問視して、

「寧ろ彼は、ルイ、或は嚮導者ブレックマンの手先と爲つたのではないかとさへ疑はれる[13]。」

と述べている。

モムブランは、文久二年、一旅行者として來朝し、齋藤健治郎なる青年を伴うて歸國し、後、薩州藩の顧問として、パリー等で活躍し、慶應三年の末、再渡し、明治三年パリー駐在の我が辨務使に加はり、外交事務を執つた所謂白山伯である。シーボルトは、文政安政と二回我が國に來たり、當時はヴルツブルグに在つたが、長發等の渡佛を聞き、パリーに來り、佛國との縁故を利用し、彼我の間を斡旋し、長發等から將來歐州に日本公使館設立の際は、雇傭すべき旨の書狀を得た。

（『幕末外交史の研究』[14]）

モンブランとシーボルトについて大塚武松氏はこのように略述しているが、いずれも日本とフランスの間に入ってうまく立ちまわっていた人物である。このモンブランはのちのパリ萬國博覧會においても活躍し、太一とはいささか因縁をもつ人物である。ロニーがモンブラン伯を紹介してくれたことはそのような点で看過できない出来事であったと云えないだろうか。

太一はモンブラン伯と出会ったときのことをのちに回想して、

「所が齋藤（薩人側にては白川健次郎と名乗れり）と云ふ者これは前年「モンブラン」が横濱へ來た時に連れて參つた男で之に野郎の鬘を冠らせてさうして袴羽織で、一人は支那人、一人は印度人、各々其の國風にて其の三人が給仕に出て、何んだか妙なことをして樂しんだ。」

（「田邊太一君の幕末外交實歴談」[15]）

というふうに述べているが、モンブラン伯そのひとの印象は綴っていない。

2

使節一行は鎖港の困難さ、その非を知って他の国々には赴くことなく帰国したところ、新任のレオンロッシュ公使が幕府に使節の結んだ約定の履行を迫ったため、筑後守以下の処罰をみたが、太一も閉門待罪を受けた。だが、これが百日間で解かれ、出役の名儀で外国奉行に属し、組頭同様の勤務を命ぜられることになった。太一のもっとも苦境の日々であった。幕府の掟で罪は許されたとはいえ、公式には官途につけなかったのである。

ところが、慶応二年、パリでの萬國博覧會開催にあたり、わが国もこれに参加することになった。

そこで慶應二年に愈々巴里に於て萬國博覧會を開かれるといふ折柄、慶喜公將軍職になられました、先づ英佛の二國へ駐在の公使を派出するといふことになつて第一に命ぜられましたのは、向山隼人正（榮後黄村）それから色々柴田日向守より申立てることがありまして、日本國も博覧會へ加入することに極りました。（中略）そこで向山隼人正が佛蘭西駐在公使を命ぜられ且又日本大君の名代として、今の水戸家の御隠居民部大輔（昭武）といふ人が博覧會へ參會することに極つた。そこで其の參會のことが終つたならば、好誼を溫ためる爲に英吉利其他條約ある國を巡廻があつて、さうして其の事が終つたら佛蘭西で修業するといふことで往かれました[16]。

太一は前出の回想談の中でこのようにパリの萬國博覧會の経緯に言及しているが、この萬國博覧會参加にはロッシュの建言が入れられていることを見落してはなるまい。

大塚武松氏は徳川昭武の渡欧についてロッシュの慫慂によるものという見解を表明し、つぎのように説明している。

佛國政府も一八六七年(慶應三)パリーに開設する世界博覧會に、參會を我が幕府に求めて來たのは、慶應元年の事である。幕府はこれを承諾するに決し、當時、横須賀製鐵所建設の用務を帯びて渡佛中であった理事官柴田剛中(日向守)に命じ、應諾の意を佛國政府に致さしめた。剛中の滞佛當時、既に薩州・長州諸藩士の中には、幕府の允許を經ずして滞歐した者があった。中にも薩州藩の新納刑部・五代才助等の二行は、文久二年(一八六二)我が國に來遊し、滞留數ヶ月、雇入れた青年齋藤健次郎なる者を拉して佛國に歸り、爾來、日本使節のパリー往訪の度毎に、我が國相手の事業を計畫し、我が國と關係を結ばんと希望してゐた伯爵モンブランと、ブルッセルに於て一商社組織の契約を締結し、また、薩州藩は、パリー博覧會にも出品するを以て、彼にその代表委員を委囑し、斡旋せしめた。モンブランは、既に慶應二年の初に於て、薩摩太守、琉球王の陳列場として、幕府出品の陳列場以外に別區劃を得たのに反し、幕府より參會に關する準備を命ぜられた柴田剛中は、パリーの富豪にして銀行家たるフリュリー・エラールを日本の名譽總領事に委囑し、また、博覧會日本部類總理事役男爵レセップの二人に萬事を委托して歸朝した。然るに、その後、將軍家茂が薨去し、慶喜が將軍職を襲ぐに及んで、かく薩州・長州諸藩士が幕府のきづなを脱して海外に活動し、國權を紊るが如き態度があるは、幕府の權威に就いて、諸外國の疑惑を誘起せしめるものであるとの疑惧の念に刺戟せられ、また、幕府はロッシュの勸説に動かされ、こゝに博覧會參列の機會に於て、幕府が實際上、主權を掌握せる所以を示し、且つ、同時に深厚な情誼を佛國に表さんが爲に、慶應二年十一月に至り、將軍慶喜の弟昭武をして清水家を相續せしめ、徳川姓を名乗り、將軍名代として、堂々博覧會に參列すべき事を命じ、且つ、他の留學生と共に、數年間、教養の爲にパリーに在學すべき事と爲し、作事奉行格小姓頭取山高石見守をその傅役に、小姓頭取菊池平八郎等七人及び奥醫高松凌雲・砲兵差圖役頭取勤方木村宗三・勘定格陸軍附調役澁澤篤太夫(榮)等がその隨員を命ぜられ、別に外國奉行向山一履は駐佛公使として、支配組頭田邊太一、その他調役・同並・同出役・飜譯掛・通辨の一列、並びに留學生として歩兵差圖役頭取保科俊太郎・砲兵差圖役勤方山内文次郎、會津藩の横山主税・海老名郡治、唐津藩の尾崎俊藏等が同行することゝ爲った。

(『幕末外交史の研究』17)

徳川昭武の萬國博覧會参加の事情についてはすでに拙著『佛蘭西學のあけぼの――佛學事始とその背景』(カルチャー出版社)18)で詳述したのでここでは再説しないが、一行は慶応三年正月十一日に横浜を出航し、三月七日にはパリに到着し、ナポレオン三世との謁見(一八六七年四月二十八日)に臨んだ。昭武の家庭教師役と一行の通弁の問題でアレキサンドル・フォン・シーボルトとメルメ・ド・カションの対立があり、いささか厄介なこともみられたが、フランス皇帝との謁見には昭武の言葉は保科俊太郎、皇帝のそれはカションが通訳するというような協定に落着いた。

田邊もそのような出来事のなかでは決して局外者ではいられなかったようであった。

このことは『幕末外交談』でカションが外務省まで出迎いて通訳の任を引き受けたいと依頼しに赴いたあと、直接カションから通弁をさせない理由を問いただされたときの事情を太一が記していることからもあきらかである。太一は保科俊太郎が横濱佛蘭西語學傳習所でのカションの教え子であることを指摘して述べているのである。

予はこれに答へて、保科は既に子が教育を受たる人物なり、然るに今佛國の

語に熟して、此盛儀に參し、通辨をなすべきに到りしは、子が教ふる所の如何を示すにたるべきものにして、子の榮譽に於ては、自から其場に參せんにまさること數倍なるべし、公使の此儀にあつて子を用ひざるは其故を以てのみ、さる不平のあるべしとは意外なりとてこれを斥りぞけたり。（『幕末外交談』19）

シーボルトが徳川昭武一行の旅行中の世話にあたったことで心底穏からぬカションが激昂して夜の十二時過ぎまで太一の部屋を去らないこともあったと『幕末外交談』のうちに述べられているように、両者の関係は緊密なものがあった。もっとも、太一とカションがどちらの言語を用いて話し合ったものかそれは明記されていないが、カションは日本語に堪能であったことを考えれば多分日本語で話したのであろう。

ところで、パリ萬國博覧會では日本国内の政情を反映するような出来事に遭遇して一波乱みることになった。薩摩藩が陰謀を企んで、琉球を徳川幕府とは別個の独立国に擬して参加させようとしていたのである。日本側は驚いてすぐさまフランス外務省のアジア局長に申し入れをしたところ、博覧会と外交とは別だという返事を受け、博覧会の責任者のレセップによって打合わせ会議への出席を促された。

所が向山（隼人正）が御前往って來いと云ふので私が參りました、參りますと其會議の問題と申すは琉球國で、そこで私は斯ういふた、それはこちらからも申し度いと思って居りました、琉球國と云ふ國が新規に持出したが、それはどういふ所から參ったか「レセップ」の言ふに琉球國と云ふ國があるが琉球國王と云ふ者から差遣された者がある。併し乍ら本當の外交手續をして無いに依て、琉球國王の使節として奈勃烈翁政府は取扱はれないが、兎も角琉球國王から差遣された者がある…　（「田邊太一君の幕府時代外交實歴談」20）

岩下佐次右衛門、市來六左衛門という二人の琉球王による代表に、琉球が丸に十の字の旗をたてていることをとりあげ、これは日本からの独立を表わして、琉球国の尊王の立場に叛くものであろうと田邊は詰問した。すると、岩下はすべてモンブラン伯が引き受けたことだと返事する。ここでふたたびモンブラン伯が登場するのだ。

これは薩摩藩の陰謀で、モンブラン伯を代理者として、薩摩藩主を琉球王に擬して徳川幕府から独立したものとして、諸国にこれを披露しようという企てをたてていたのである。結局、このパリ萬國博覧會という国際舞台において幕府と薩摩藩の対立の醜さが露呈されるという結果をみたのだった。

太一がモンブラン伯との交渉の任にあたることになった。

それで色々「モンブラン」を說いて見ました、所が其内「レセップ」も少し怒ったといふのは「モンブラン」は何でも無い「レセップ」は日本政府の理事官といふ肩書を持って居ります。其向ふを張って自分は琉球國王の代表で「レセップ」に對抗しやうといふ虚榮心から起ったのでありますから「レセップ」に捕まって「モンブラン」も閉口して仕舞った、そこで岩下さんへ掛合になって日本支那琉球暹羅と云ふ建札のある所の琉球と云ふ字を取って仕舞った、丸に十の字を引込ませると云ふことになった…」

（「田邊太一君の幕府時代外交實歴談」21）

一八六七年四月一日（慶応三年二月二十七日）にフランス皇帝ナポレオン三世と皇妃ウージェニーの来臨を迎えてパリ万國博覧會はヨーロッパ諸国、アメリカ合衆国、エジプト、モロッコ、中国、シャム、日本などの参加国をえて十一月三日まで開かれたが、薩摩藩は全権使節として家老岩下左次右衛門を派遣してきた。このほかに佐賀藩も出品参加を申し出ていて、日本としては幕府を含め複数の〃政府〃の参加をみたわけである。

幕府の外国奉行駐仏理事官・柴田剛中に対してフランス当局はかねてから幕府の参加をすすめてきていたが、幕府当局は最初は気乗り薄だった。ところが、モンブランとの直接交渉で薩摩藩の参加が表面化するや、幕府はこれの参加を決定したのだ。日本の主権が幕府にあることを表明する必要に迫られたわけである。

薩摩の方ではモンブランに博覧会当局との事務交渉を委ねていたので、モンブランは幕府に対抗して「フィガロ」紙などフランスの有力紙、雑誌に幕府と薩摩藩とがあたかも対等の位置にあるような論説を書かせたりした。物品陳列場の標記名にしても両者に紛争を起こさせるように計ったが、結局、日本大君政府、薩摩大守政府、肥前大守政府と記すことに取りきめた。だが、その結果、日本がドイツと同様に連邦制の国とみなされるに至り、幕府の威信を失墜させた。この責任が太一にかかり、免職・帰国の命令を受けるに至った。

太一は帰国の途中セイロンで大政奉還の報に接した。慶応三年十月二十八日横浜到着、翌日、待罪書（差控伺）を提出したが、別段沙汰もなかった。翌年正月、鳥羽伏見の戦で幕府の軍は敗北を喫し、慶喜はひそかに江戸に戻った。太一は致仕徴乞うたが許されず、大久保一翁の奨めで同年三月六日に目付役に就任し、江戸城の警固に当った。

やがて江戸城開けわたしとなり、太一は上野山下の自邸に帰ったが、世の騒乱を避けるために妻の己巳子、長子の次郎一を千住在の竹塚の梅田に移し、さらに本所番場の別邸に引越した。この年十二月二十三日、本所のその別邸では太一の長女龍子が生まれている。

明治元年八月、徳川家達が駿河に七十万石として移封されると、太一もこれに従って移住した。沼津に徳川家兵学校が同年十二月に設立され、その教授に任命されたのである。

従来の八百万石から七十万石に縮小された知行高では徳川家としては家臣を養いきれなくなり、閑職に甘えさせるようなことはできず、家臣ひとりひとりに定職を持たせる必要が生じ、無禄移住した青年たちのうちから将校を養成し有事に備えるいわゆる旧臣授産のためという目的からまず兵学校の設立が建議された。もちろん、これだけの理由によるのではない。第二に西洋文明の活用もある。すでに長崎のみならず欧州にまで赴き新知識を吸収してきた多くの人材を放置することなく、これをもっとも有効に活用するためには兵学校の設立がのぞましいのだと考え、旧幕府陸軍関係者がもっとも多く移住した沼津に建てることにしたのである。沼津の地を選んだのも徳川家の恭順を示すには藩庁所在地ではない方がよいという配慮もあったようだ。また、水陸交通上の便も考慮に入れられたことだろう[22]。

いずれにしろ、明治元年十月、年齢三十歳以下の者三百名を選び、兵学校入学のための予備科にこれを編入して、素読（十八史略、国史略、元明史略）、算術（分数、開平、開立）、作文（公用文章）などを授業し、翌年秋までに四回の入学試験で百余名を資業生に採用した。資業生の入学資格は徳川藩士とその子弟で十四歳以上十八歳まで、附属小学校の修業者に限られていたが、初期は前述のように例外がみられたのである。修業年限は四年間である。この課程を終えると本業生の試験が受けられる。これは修業年限四カ年である。本業生の課程を終了し、つぎに試験に合格すると頭取（校長）から陸軍士官の免許状があたえられる。

なお、員外生という制度があり、これは軍人志望以外で洋学、数学などを修めようとする者のためのもので、資業生が月四両の手当を支給されるのに対して銀十五匁（一分）の授業料を払うことが義務づけられている。のちに他藩からの入学者に員外生の待遇があたえられた。

明治元年末に任命された頭取以下教授陣は旧幕時代の陸海軍または昌平黌、開成所などのスタッフ、あるいは海外留学者によるものであ

った。

明治二年末の教授陣をつぎに掲げよう23)。

頭　　取　西　周　助
一等教授方　伴　鐵　太　郎
同（取締）　塚本桓甫（取締）、大築保太郎（取締）、赤松大三郎
同　　田　邊　太　一
一等教授並　（英語）渡　邊　一　郎
二等教授方　（数学測量）浅井雁六、（英語）乙骨太郎乙
三等教授方　平岡芋作、（操練打方）萬年精一
（操練打方）間宮鐵太郎、（操練築造）天野　鈞
（仏語）永持五郎次、（仏語）石橋鎗次郎
（英語）高嶋四郎平、（仏語）黒田　久馬
（書史）中根　逸郎、（操練）揖斐吉之助
（数学）神保寅三郎、（英語）薗　鑑三郎
久須美七十五郎、（操練打方）蓮池新十郎
（操練打方）森川大三郎、（仏語）山内文次郎、
三等教授並　山本譽五郎、鈴木源五郎、杉浦赤城、榎本德次郎
員外教授方　（仏語）杉　亨二
教授方手傳　山田清五郎、小野清照、熊谷次郎橘、鈴木悟一、淺野源四郎　（以下略）

田邊太一は一等教授として任命されているが、いわゆる取締でもなく、教授内容も限定されていなかったようである。

徳川家兵學校は明治二年八月の静岡藩制改革でその所在地名を冠して沼津兵學校と改称し、やがてたんに沼津學校と呼ばれるようになったが、明治四年九月には兵部省に移管され、同年十二月沼津出張兵學寮と改称し、翌五年五月東京に移されて東京兵学寮に合併した。このような変遷をたどる兵学校であったが、ここに任命された教授スタッフも時代の激しい動きにつれて大きく異同をみた。

明治二年秋には太一は新政府により外務省出仕を命ぜられ、沼津を離れた。山内文次郎、揖斐吉之助が陸軍に、赤松大三郎が海軍に、ついには頭取の西周にまで兵部省への出仕が命ぜられるという有様であった。

新政府が旧幕府の外交事務をそのまゝ引きついだ関係上、その遂行のためには旧幕府の外務官僚の援助なしにはむずかしく、太一は明治三年一月十日付で外務少丞となり、各国往復書簡と大政官日誌編纂の任に当ったのであった。

太一が兵学校教授であったことはこの学校においてフランス語が教授されていた事実を考慮するときわめて注目される。しかしながら、太一がそこではフランス語の教師ではなかったことは看過してはならない。太一はフランス語の知識を多少はもっていたかもしれないが、これを教授するほどには至っていなかったように考えられる。

ここで、田邊太一のヨーロッパないしフランス体験のもつ意義を考えてみたい。

太一が最初に横浜鎖港談判の使節に随行してヨーロッパに渡ったとき、彼の立場は開国のそれであり、使命の矛盾に任務をおりることを考え、それを水野筑後守に将来のために外国を見聞せよと諫められて思いとどまったという経緯があったことは前述した。三百年の鎖国日本から飛びだして広く世界をみてこようという意図のもとに外国に向ったのであったが、これは太一そのひとには積極的な外国への志向がなかったことを表わしていないだろうか。どうしても外国に行きたいという意欲に支えられた渡欧ではなかった。

太一は昌平黌で学問した人であり、外国の学問（蘭学または英学）についてもとくに関心をもって学んだことがなかった。だが、太一は外国奉行支配下の書物御用出役になったことで外国との関係の深い任務に携わり、以後、外交の舞台に立つようになるという運命を負うのであった。

私は幕府の頃には極々卑官にて知らるゝ者では御座いませんでした……只今も知らるゝ者では御座いませんが……然し外國方を勤め外國に關する文書を扱かひ御書翰掛りで御座いましたゆゑ閣老外國公使等と秘密の談判などの起りましたる時は、三奉行なんどゝ申升歴々も其席を避くる慣例ではありまするが小身（せうしん）ながら襖（ふすま）の蔭におりまして其談話を筆記いたしますが役目で御座りましたゆへに、外交の機密は知ることを得られ、また知らざるを得ざる地位で御座いました。

（「田邊蓮舟君談話　其二」[24]）

太一は幕府外交の機密に触れることのできる位置にいたので、それをのちにさまざまな機会に回想的談話や『幕末外交談』など著作に述べているが、不思議なことにその外国体験を事実の経過として表面的には叙述していても、そこで得たであろう印象とか感想とか主観的感慨は吐露していない。個人的体験の叙述がないのだ。いくどか引用してきた談話や著作には外国の風物や文明・文化に接して受けたであろう印象の記述はみられない。外交上の交渉経過やこれについてのその判断、見解、感想などは詳述されているが、たとえばフランスあるいはフランス人についての印象を記すということはない。ましてフランス文化を論述するはずはない。太一がその置かれた位置から外交の接衝の渦中にあり、これを記録することで精一杯であったからその餘のことは割愛したのだろうか。いや、個人的感想を語るだけの余裕がなかったのだろうか。それは太一がその任務に課せられた客観的叙述者としての態度の当然の結果であったのだろうか。

太一の外交談の一つ一つは別段とりわけ無味乾燥な叙述で綴られているのではないが、事件の当事者あるいはそれに近い立場の人間として事実の記録に努力が重ねられたという感じをぬぐえない客観的な調子で叙述されている。すなわち、太一は幕末外交の舞台を客観的に叙述する記録者であった。舞台の幕がすべておりたあとにいわゆる回想の形で語り、あるいは書き綴るという性質のものであったために、太一はつとめて客観的立場で、そのすぐれた記憶力に依存しつつも、信憑性のおくことのできるような内容の〝記録〟を叙述していったのであろう。そのような場合、個人的な感想とか私的な印象とかは意識的に払拭・削除されていたのでないだろうか。

幕府の外交政策とこれをめぐっての諸藩、諸外国のそれとの対立などについては太一もその見解、感想を洩らすことがあったが、フランスでえた印象や感想はどこにも書きとめていない。個人を超越して公人としての立場で幕末外交史を生きた人、それが太一の幕吏としての生き方であったのだろう。パリ萬國博覧會の規模の大きさに驚いたり、フランス宮廷の豪華さに嘆息したりするよりも、太一にはモンブラン伯の策謀やカションの暗躍の方により大きな関心をひきつけられたのであろう。

旧幕府時代の見聞と経験を踏まえて、維新後に蒐集した史料を参考にしてまとめた太一の『幕府外交談』（明治三十一年六月　富山房刊）はあきらかに幕末外交史であるが、幕臣としての立場と開国主義的見地から幕府の外交政策を批判した書である[25]。尊王攘夷史観によらない幕末政治史として太一のこの書は高く評価されているが、その記録性に加えて文章の格調の高さ、流麗さも十分に認められてよいだろう。

太一は明治四年十月、特命全権大使岩倉具視らの欧米派遣に随行

し、六年九月に帰国したあと、七年八月、参議大久保利通が清国に台湾問題で派遣されるとき同地に赴き、やがて清国公使館勤務となり、十五年九月帰国、翌年九月には元老院議官となり、錦鶏間祗侯として遇せられ、二十三年に貴族院の勅選議員に選ばれた。元老院議官時代が太一の全盛時代で、この頃から蓮舟の号を用い、風流に耽り、詩文を書くようになった。

いうまでもなく、太一は明治の才媛、女流作家として名声を博した田邊龍子、のちの三宅花圃の父であり、その文筆の才は木村芥舟や鹽田三郎などにも早くから認められていた。島崎藤村が太一に中国の文学を学んだことも有名な話である。退官後の太一は名利栄達を求めず、社会の俗事にとらわれず、もっぱら好きな漢詩や漢文の釈読で日々を過したようである[26]。

太一は幕臣としては家格の低さゆえに才能の割には高い地位に進めず、新政府にあっては幕臣だったことでそれほどの処遇を受けられなかったという憾みはあったが、それなりに充実した生涯を送ることのできた幸福な人であったといえよう。本質的には漢学、漢詩文的な趣味の人であったとはいえ、ヨーロッパの地を踏み、文明開化の洗礼を受けたことで、近代的感覚を涵養されたことも見落してはなるまい。

残念なことに、幕末に早くも開国主義思想を抱いていたわりには進歩的な見解を披瀝する文章を書いた形跡は認めがたい。太一の周辺には福地源一郎(櫻痴)、箕作麟祥など進歩的な若者が集っていたので時代的感覚にはおくれることがなく、そうした環境からも開国主義へ指向したものと考えられるのである。太一そのひとの資質はむしろ旧時代的教養、つまり儒学、さらに漢学に才能を開花することの方に適した人であったようである。死後、甥の田邊朔郎工学博士によって刊行された『蓮舟遺稿』はそのような側面をはっきり示したものであった。

蓮舟・田邊太一は幕末外交の歩みを書いたという点でまず評価される人物であったが、日本近代文学史の上でもその漢詩、漢詩文の巧みさ、粋人としての文章の面で忘れられぬ文学者であったのである。

明治四十四年、文部省に維新史料編纂会が設けられたとき、太一は『幕末の外交』[27]と題して講演したが、すでに八十歳の高齢であった。やがて明治は大正にかわって、大正四年九月十六日、太一は従三位に叙せられたこの日、ついに黄泉の旅に向った。数え年八十五歳であった。青山墓地(第一種ロ八号十六、十七側の七)に葬られたが、昭和四十六年一月に遺族によって改修され、ただ田邊家之墓とのみ墓石には刻まれているにすぎず、もはや昔日の面影を偲ばれえないのは残念である。

(一九七五・八・一四)

註

① 田邊太一の生涯については、坂田精一氏が『幕末外交談』(平凡社、東洋文庫69)上巻に付した「解説　一、著者、田邊太一について」に多くを負うている。

② 鹽田良平「花圃作『夜半の埋火』に就いて――田邊蓮舟傳記資料――」三二～三三ページ(『松蔭女子學院大學研究紀要』八号　昭和四十一年十二月)

③ 大塚末松『幕末外交史の研究　新訂増補版』七〇～七一ページ(宝文館出版株式會社　昭和四十二年五月二十日)

④ 田邊太一『幕末外交談』三二〇ページ(富山房　明治三十一年六月)

⑤ 大野虎雄『沼津兵學校と其人材　附屬小學校並沼津病院』六十六ページ(昭和十四年五月)

⑥ 註④三四四～三四五ページ

⑦ 註④一二九～一三〇ページ

⑧ 「田邊太一君の幕府時代外交實歴談」十五ページ(『史談會速記録』一六八号　明治四十年二月)

⑨ 佐藤文樹「レオン・ド・ロニ――フランスにおける日本研究の先駆者――」(上智大学文学部紀要「仏語・仏文学論集」七号　昭和四十七年参照。)

⑩ 元治元年「池田筑後守復命書」

⑪ 三浦義彰『文久航海記』二五六ページ(冬至書林　昭和十七年五月)

⑫ 註⑧十五～十六ページ

⑬ 註③七十五ページ
⑭ 註③七十四～七十五ページ
⑮ 註⑧十五ページ
⑯ 註⑧十七～十八ページ
⑰ 註③三〇一～三〇二ページ
⑱ 拙著『佛蘭西學のあけぼの――佛學事始とその背景――』第二部第三章参照(カルチャー出版社　昭和五十年六月)。
⑲ 註④四八三～四八四ページ
⑳ 註⑧十八～十九ページ
㉑ 註⑧二十一ページ
㉒ 註⑤参照。沼津兵學校については大野虎雄氏の労作に多くを負っている。
㉓ 註⑤四十六～四十七ページ
㉔ 「田邊蓮舟君談話　其二」三十八ページ(『舊幕府』三巻五号)
㉕ 註①「解説」二。「幕府外交史料としての『外交談』」参照。
㉖ 註㉕
㉗ 維新史料編纂會『第一回講演速記録』(明治四十四年)所收。

田邊家の墓(東京・青山霊園)